

被災地派遣レポート〈第119回〉

東京都立大塚ろう学校経営企画室 田谷 拓之さん

1 はじめに

私は、平成25年4月1日から1年間、岩手県復興局生活再建課へ派遣された。私が派遣を希望したきっかけは、水道・電気などのインフラが復旧していない震災直後、宮城県南三陸町に1週間派遣された時に、マンパワー不足を感じたこと、また、短期ではなく長期に渡って復興支援の手伝いをしたいと思ったことからであった。

震災から2年経過して訪れた被災地の状況は、瓦礫はほとんど無く、見渡す限りの平面であった。震災直後を知らず、瓦礫がない状況を初めて見た人は、もともと何もなかった場所なんだ、と思ってしまふ程である。

しかし、コンクリートの土台しかない平野をひっきりなしに行きかうダンプや、「希望のかけ橋」と呼ばれる巨大な土砂運搬のためのベルトコンベアの建設が進んでいる状況を見ると、復興に向けて着実に進んでいる！と実感できるものであった。



【希望のかけ橋の工事状況：既に完成】

2 業務について

私が配属された復興局生活再建課の被災者支援担当とは、被災者の支援、義援金の配分、生活再建支援金や災害弔慰金の支給に関することなどを扱う部署であった。

そこでの私のメインの担当は、災害救助法に基づく救助の一つとして県が実施する応急仮設住宅の供与業務でした。これは、住家の全壊、全焼又は流出により居住する住家がない方で、自らの資力で住宅を得ることが出来ない方に住宅を供与するというものであった。

通常、県が建設したプレハブの仮設住宅に入居してもらうことになるが、津波により大きな被害を受けた沿岸地域は、リアス式海岸という急な傾斜の山地が海岸にまで迫り平地が少ない地形であったため、再び津波が来ない高台において建設用地の確保が難しく、被災者がすぐに仮設住宅に入居できない状況にあった。そこで、流失を免れた地区や内陸部の民間賃貸住宅を県が借り上げ、被災者に住居を提供して対応することとした。（「見なし仮設」と言われ、阪神・淡路大震災時も提供している。）

私の業務は、これらの応急仮設住宅に係るトラブル対応、契約業務、退去対応などであったが、県としての一番大きな課題は、既に、震災後3年が経過しようとしている中で、いつまで、被災者に応急仮設住宅を供与していくのかということであった。

岩手県では、家を失った被災者の生活再建に向けて、自立再建するための補助金制度の実施や、公営住宅法に基づき県等が整備し、自宅を失った被災者に安い家賃で恒久的に貸し出す災害公営住宅の建設を進めていたが、用地取得等の遅れなどで建設が進まず、応急仮設住宅を出た被災者を受け入れる住宅が不足している状況であった。また、沿岸部と内陸部での復興状況が違うことから、地域に応じた対応が求められていた。こうした状況を踏まえ、国や関係市町村と協議を進めながら、応急仮設住宅の供与期間の延長方針を策定し、それに応じた対応を進めた。

私は、上記業務のほかにも、「災害弔慰金等審査会」という、災害関連死の認定等を行う審査会の運営業務等にも携わらせていただくなど、貴重な業務経験をさせていただいた。

3 業務を通じて考えさせられたこと

私の業務であった応急仮設住宅の供与は、「住」という、被災者の生活に特に密着したものであったため、色々考えさせられた。

被災者から、先週、仕事がクビになってしまったので、仮設住宅の供与期間を5年は担保してもらわないと生活できないという声や、自立再建された被災者の方から、他の被災者がいつまでも義援金や補助金をもらって仕事をしないでいることは、甘えではないのかといった声など、直接受けることが多く、行政としての難しさを感じた。

また、東京に首都直下型大地震がきて、大被害が生じたときのことを常に意識をせざるを得なかった。岩手県の職員の方や、他県の応援職員の方と、首都圏で起きた場合どうしたらいいのか、何を準備しておけばいいのかなど話し合い、アドバイスをいただいた。初動時の迅速な対応のために、BCPや地域防災計画で定める大きな流れだけではなく、更に一步踏み込み、実業務で使用する定型様式や、協力団体をお願いする事項などを具体的に定めておき、また、誰にでも分るようにマニュアル化しておく必要性を強く感じた。

4 最後に～長期派遣に従事して～

一年間は、あっという間に過ぎ去ってしまった。業務として派遣されているにも係らず、岩手県職員だけではなく、県民の皆さんから、遠いところからよく手伝いに来てくれたと、感謝された。大変嬉しくもあり、また、頑張らなければとの励みにもなった。

岩手県へは、スキー場に数えるほどしか行ったことが無かったが、岩手県の皆さんは優しく、岩手県を故郷とも思えるほど、密度の濃い貴重な体験をすることができた。

最後に、派遣先、派遣元で支えてくださった多くの方々に、この場をお借りして御礼申し上げます。一年間、本当にありがとうございました。